創文

2007.05 NO.497
昭和四一年七月七日第三種郵便物認可
平成十九年五月一日発行（毎月一日発行）

「家事をしない」、「妻との会話がない」、「ポルノグラフィと手を切れない」などの問題を抱えているが、ドブソンもまた詳細な数字を挙げながら「望ましくない父親像」を描き出す。ドブソンが見つけた一九七〇年代の調査によれば、中流家庭の父親が就学前の子供と接する頻度は一日に二・七回、一回につき一〇～一五秒の会話が行われるに過ぎず、一日平均の会話時間は三七秒だった。これでは父親が我が子を教育することはできないと嘆くドブソンは、この状況が厳しい競争社会（ラット・レース）によって生み出されたと主張する。競争社会の中で自らの利益、興味を最優先に行動するあまり、こうした男たちは家庭に対して果たすべき精神的な義務を置き去りにしている、というのがドブソンの批判である。

一九八〇年代は「ヤッピー」の時代だった。レーガン大統領（一九八〇―八八）が推進した規制緩和がもたらした機会を最も享受した都会のプロフェッショナルたちは、伝統的価値観や家族の形態など意に介さず、自己の利益追求に熱心だった。レーガン大統領は社会的保守派に支援されて登場した印象が強いが、実際にはレーガノミクス支持派、すなわち経済的リベラルの時代だった。一九八七年一二月に公開されたオリヴァー・ストーン監督作品『ウォール街』でゴードン・ゲッコーが「貪欲は善だ」と咆えていた時代である。しかしこの利己的な自由競争による繁栄は『ウォール街』が公開される直前の同年一〇月、一九二九年の大恐慌時を上回る株価の大暴落、いわゆる「ブラック・マンデー」によって一旦終止符を打たれていた。そして『コップ』が公開された一九九〇年はウォール街の大物（タイクーン）を主人公にした映画『虚栄のかがり火』が失敗作扱いされた年でもある。トム・ウルフのベスト・セラー小説を元に監督はブライアン・デ・パルマ、主役にトム・ハンクスを迎え、盤石に見える制作陣がつくったこの映画の興行収入は一五〇〇万ドル（アメリカ国内）にとどまった。経済競争に明け暮れた八〇年代への反省として『コップ』が制作され、PKが家庭への回帰を男性に呼びかけたと考えるのはうがちすぎだろうか。

一九九七年の大集会の後、PKの活動はメディアの注意を惹かなくなってしまった。経済的に破綻したために大集会を組織できなくなったからだ。しかしPKは活動を停止したわけではない。華々しい大集会ではなく日常生活において、会員同士が切磋琢磨し合う研修グループを自発的に開催することを促しているからである。『コップ』のキンブルのような、たくましく、かつ家庭を大事にする父親、というメッセージは草の根の組織を通じてどこまで広がるのか。ゲイ・カップル、シングル・ペアレントなど多様な家族のあり方を排除するメッセージに終わらないことを期待するばかりである。

（ひらい・やすひろ　成城大学社会イノベーション学部教授／アメリカ研究）

サイモン・キャメロン伝

――ある〈政治的人間〉に関する断章――

西川賢

一　はじめに

〈政治的人間〉を何らかの仕方で理解することこそ、政治学という学問の究極の目的の一つといえるのではないだろうか。そして、かかる理解は必ずしも純粋な学術的知の営みに収斂しきらない、対象に対する深い「愛」ともいうべき心の働きがあってはじめて成就するものであり、人間に対する理解そのものを深めることによってのみ達成しうるものである。そのことは筆者が専門とするアメリカ政治の分野においても例外ではない。この小論ではサイモン・キャメロン（Simon Cameron）という十九世紀のアメリカ合衆国に生きた一人の政治家に焦点を当て、彼の政治家としての人生に関する自由なスケッチを試みたい。

サイモン・キャメロンという人物について、今ではアメリカ人ですらその名を知るものは極めて少ない。ペンシルヴェニアの州都ハリスバーグに遺されたヴィクトリア様式の豪壮なサイモン・キャメロン邸は人気の観光スポットとして知られる。或いは、一部の歴史家はエイブラハム・リンカーン政権の陸軍長官・ロシア大使としてのサイモン・キャメロンを辛うじて記憶の片隅にとどめている。もはや今日、キャメロンに関する人々の知識はその程度のものにすぎず、彼がどのような政治的人間であったのかということについて顧みようとするものはいない。

ではなぜ、そのような人物を敢えて取り上げようとするのか。そのきっかけを与えてくれたのは、筆者がペンシルヴェニア州に点在する文書館にて断続的に行った政治文書の渉猟・収集作業であった。そのとき偶然にも、キャメロンが創設した「五時会」（Five O'Clock Club）という組織に関する未発見の史料が目に飛び込んできたのである。困難をものともせず権力の階段を上りきった人――キャメロンに興味を持ち、彼の人生について調べていくうちに、やがて彼の生涯が〈政治的人間〉の一つの典型的パターンを指示している事実に気がついた。ゆえに、彼の生きた時代と現代とでは空間的・時間的に大きな隔たりがあるにも関わらず、いささか断章的ながら、彼の人生を理解することを通じて、われわれは〈政治的人間〉に関する理解へと到達しうるのではないかと思う。

二　その生い立ち

まずサイモン・キャメロンという政治家の生い立ちに関する話か

らはじめようと思う。

サイモン・キャメロンはスコットランドの名家・キャメロン一族の統率者であったドナルド・キャメロンの子孫であるチャールズ・キャメロンとドイツ系移民の娘マーサ・プフォウツの嫡男として、一七九九年三月八日、ペンシルヴェニア州ランカスター郡メイタウンで誕生している。チャールズに関しては史料がなく不明な点も多いが、ランカスター郡で仕立屋や酒場を経営する実業家であったとされる。息子サイモンが誕生したころには既に家産が傾いており、チャールズの手がける事業は軌道に乗っていなかった様子である。恐らくはこのような経済的苦境のせいもあり、キャメロン一家はサイモンがまだ幼少の頃、住み慣れたランカスター郡を捨ててノーザンバラード郡に新天地を求めた。しかし、ノーザンバラード郡に移住した直後に父チャールズはこの世を去り、サイモンは同地の実業家アンドリュー・ケネディが経営する新聞印刷所へと三年十ヶ月の契約で徒弟奉公に出されたのであった。新しく始まった新聞印刷所での生活は貧しいもので、サイモンは年額二十ドルの給与と住居・食事が保障されるだけの文字通り最低限の生活を余儀なくされた。

しかし、ここでもキャメロンを襲う不幸はやむこと無く、ケネディの経営する印刷所は経営が悪化したために一年余りで倒産してしまった。かくして孤児同然となったキャメロンは流浪の末、州都ハリスバーグに辿り着いた。ハリスバーグに到着したキャメロンは新聞社を経営していたジェームズ・ピーコックという人物のもとで住み込み奉公をすることになり、そこで十数年間も働いている。この十数年間に関する確かな史料は存在せず、確実にいえることは、やがてキャメロンの努力が実を結び、一八二一年にはバックス郡の小さな新聞社を任されるまでに出世したということのみである。

以上のような苦難に満ちた幼少期、不遇極まりない下積みの時代こそ、サイモン・キャメロンという政治家の処世術や忍耐力を培った時代に他ならない。それはサイモン自身が晩年になって、「木綿のハンカチ一枚を手に卑しい印刷屋の徒弟から身を起こし、抑えがたいほどの活力と堅忍不抜をもって、私は財産を築きあげた。そして、ついにはペンシルヴェニア州という偉大な州を代表する連邦上院議員にまで上り詰めた」と回顧していることからも明らかである。またキャメロンが終生にわたって座右の銘としたのが聖書の言葉をもじった「求めよ、さらば成し遂げん」("Ask, and it shall be done")であったことも注目に値しよう。ここには逆境をものともせず、困難を打開するべく挑戦を続けるという政治家としてのキャメロンの強靱な精神力と旺盛な権力欲が凝縮されているように感じられる。

その後、キャメロンは新聞業を皮切りに銀行業、鉄道業、そして土建業に相次いで進出して財をなし、一八五〇年代までには州内の主要な企業を多くその傘下に収めていった。このようにビジネスの世界における立身出世に成功したキャメロンは潤沢な資金力にものを言わせ、遂に政界へと進出していったのである。

三　リンカーンとの邂逅

その苦難に満ちた幼少期と勤倹力行など、キャメロンの前半生はどこかその同時代人であったリンカーンを髣髴とさせるものがある。しかし、その類似点にも関わらず、この二人は一八六〇年に至るまで、ついぞかかわりを持ったことがなかった。共和党は一八六〇年の大統領選挙に際して分裂の危機に瀕していたが、そのような危機と混乱の中で、両者は運命的な出会いを果たすことになる。

当時の共和党内部には一方で奴隷制即時廃止を声高に主張する急進派、他方には東北部の産業資本家を中心とする一派がおり、大統領選挙に向けてこれら異分子を糾合し、多様な利害をまとめあげる必要に迫られていた。一部の人々はキャメロンを大統領候補に推したが、キャメロンはこれを固辞し、取引や脅迫的手段まで用いて分裂寸前の党内をリンカーン支持へと一本化することに成功している。しかし、キャメロンはリンカーンの人柄に魅せられていた訳でもなければ、救国の使命感に駆られていたわけでもなく、ましてや奴隷解放思想のような理念に突き動かされていたわけでもない。キャメロンはリンカーンとの間に当選の暁にはキャメロンを陸軍長官、ないしは財務長官のポストに就けるという密約を結んでおり、それに忠実に行動したにすぎないのである。

だが、リンカーンは選挙後「恩人」であるキャメロンの陸軍長官任命を大いに逡巡したと伝わる。というのも、キャメロンが陸軍長官に任命されそうだという噂が流れるや否や、多方面からの反対が噴出したからである。どうにか反対を押し切って陸軍長官に任命されたキャメロンであったが、彼の下での陸軍省には南北戦争という未曾有の危機の只中であったにも関わらず汚職のうわさが絶えず付き纏った。ついに堪忍袋の尾を切らしたリンカーンは僅か十カ月あまりでキャメロンを駐露大使へと「左遷」したのであった。

四　「五時会」の設立

リンカーン政権を辞した後、キャメロンは一八七七年までペンシルヴェニア州選出の連邦上院議員を務め、在職中にその影響力を駆使してペンシルヴェニア共和党内部に存在する競合閥を次々と粛清していった。しかる後、彼はマシュー・クウェイをその右腕として迎え入れ、一八七七年には連邦上院議員の地位を長男であるジェームズ・キャメロンに譲り渡すと、政治の表舞台から姿を消した。

しかし引退後もキャメロンは隠然たる影響力を保ち続け、配下であるクウェイを介してキャメロン・マシーンを磐石のものとする努力を怠らなかった。このときキャメロンの意を受けたクウェイが、州内の各郡・各都市に割拠する共和党勢力の相互利害調整のために創設したのが、冒頭でも述べた「五時会」と呼ばれる組織である。これは日本の政治に照らしていえば、さしずめ「後援会」に相当する機能を果たすものであった。

「五時会」はキャメロンが一八六〇年の大統領選挙に備えて一八五九年に設立した「キャメロンとリンカーン・クラブ」(Cameron and Lincoln Club)をその原型とする。残された史料は僅かではあるが、そこから推測するに、同組織は一八六三年には「キャメロン・クラブ」(Cameron Club)と改称され、さらに一八八〇年代の末頃に「五時会」と名を改めて存続されていったものであろう。「五時会」は州内のすみずみに網の目を張り、主要な共和党勢力に対して、その政治的影響力の大きさに応じて猟官を配分し、このような利益誘導によって共和党一党支配体制を支える原動力となって

いったのである。

かくして、「五時会」の設立をもって、ペンシルヴェニア州内に割拠する有力な政治勢力を一丸となし、州政治の全てを決定しうるような政治支配体制がペンシルヴェニア州に現出した。爾後、「五時会」はフランクリン・ローズヴェルト旋風に沸く大恐慌時代の一九三四年まで、実に七十年にわたって存続し続けたのである。留意しておきたいのは、「五時会」が存在していた間、共和党が文字通り選挙において驚異的な強さを誇ったという事実である。例を挙げると、一八六〇年から一九一一年までの時期において、共和党は平均して選挙で全連邦下院議員選挙区の約七割を制し、十二回の大統領選挙の全てを制した。また、共和党は十三回の知事選挙の内十一回、連邦上院議員選挙十三回の内十一回において圧勝を収めることに成功している。文字通り、この時代はペンシルヴェニア州における「共和党黄金時代」であったといってよい。

五　おわりに

一八八九年六月二六日、サイモン・キャメロンは十余年の隠棲生活の後、老衰のためペンシルヴェニア州メイタウンでその生涯を閉じた。キャメロン死去の報に接しても、それはもはや世人の耳目を集めることはなかった。リンカーンがその死後アメリカ民主主義を体現する「英雄」として、また「奴隷解放の父」として偶像化されていったのとは対照的に、キャメロンの名前はその晩年には既に歴史の葬るところとなりつつあったのである。

しかし、なぜリンカーンは人々に記憶され、反対にキャメロンは忘れ去られていったのか。それはまさに両者における〈政治的人間〉の差に起因するものであると私は考える。両者における最大の違いは、キャメロンを衝き動かしていたのが激しい権力獲得への欲望であり、そこに理念や思想と呼ぶべきものが存在していなかったことであろう。無論、リンカーンにも権力欲は存在したし、彼が政治的駆け引きに熟達した政治家であったことはいうまでもない。だが、リンカーンは徒に権力を希求するだけの政治家ではなく、掌中に収めた権力を活用しつつも、なおかつ理念や世界観を並行して追求しうるだけの能力を兼ね備えた希有なバランス感覚を持った政治家として、今なお記憶され続けているのである。

ただし、そのことはキャメロンがリンカーンに比して劣っているということを意味するものではない。不遇な幼少期に由来する強靱な意志力に基づき、明確な目的と断固たる手段をもって生き抜いた〈政治的人間〉であったという点では、キャメロンはリンカーンに勝るとも劣らない。そのことは、キャメロンがリンカーンを大統領に推すことで共和党を分裂から救出することに一役買い、また七十年にわたるペンシルヴェニア州における共和党黄金時代の礎を築き上げるという偉大な業績を残したことからも明らかである。

このように、〈政治的人間〉とは多様かつ深淵なものである。そこに一面的な評価を加えることが困難であるということを、我々は今更のように痛感せざるを得ない。

（にしかわ・まさる　慶應義塾大学GSEC研究員／アメリカ政治史）

仮構の力

――曹植の文学への問い――

大上正美

いわゆる建安文学とか建安詩とかは、後漢末の建安年間及び魏初の黄初年間のそれをいう。大きく前後期に分けるのに、私は建安二十二年（二一七）を境に考えている。前期は曹操の権力と精神とに主導され、曹丕・曹植及び建安七子たちによって繰り広げられた、絢爛にして激情雄渾の五言詩の世界である。建安十三年に孔融が処刑され、十七年頃阮瑀が死に、二十二年に王粲が従軍中に死ぬ。またこの年疫病が流行し、劉楨、徐幹、陳琳、応瑒が相次いで亡くなった。その年の十月には曹丕が魏王曹操の跡継ぎと決まり、太子となった。この二点に象徴されるようにして前期は終わる。こうして後期は曹植の文学が展開されることになり、文学は内面化の問題を深く抱え込んだのである。

曹植はその後長く詩聖と位置づけられ、例えば梁・鍾嶸の『詩品』には「嗟乎、陳思（王の曹植）の文章に於けるや、人倫の周（公旦）・孔（子）有り」と評されている。文辞に際だつ多彩な五言詩の抒情世界と、それを支える「風骨」の詩精神について言うのだが、今ここで問題としたいのは、立太子争いに敗れた後の苛酷な境遇と作品に見る悲痛な内面との関わりについてである。関わりの意味するものから、文学とは曹植にとっていかなるものであったか、そのことが私にどういうことを示唆してくれるかである。従って、後半生の文学の内面化の問題として、豊かで幅広い曹植の世界をその全体像でなく、単に一義的にとりあげてしまうことになる危険もないわけではないが、本稿は、曹植の文学で私が考えたこと、と題するほどのものであると、理解願おう。ただ、文学の全体像なるものも根源性への視点を持たぬ限り、表層の提示に終わってしまいがちであると、私は思っている。

曹操によって側近の楊修を、曹丕即位後に丁儀・丁廙を誅殺され、曹植自身も藩国を次々に遷され続け、結局四十一歳で亡くなる。その苦境の思いを、例えば「雑詩六首」其二の詩は歌うとされる。

転蓬離本根　転蓬　本根を離れ
飄颻随長風　飄颻として長風に随う
何意回飈挙　何ぞ意わん　回飈　挙がり
吹我入雲中　我を吹きて雲中に入らしめんとは
高高上無極　高く高く上がりて極まり無し
天路安可窮　天路　安んぞ窮む可けんや
類此流宕子　此れに類す　流宕の子
揖軀遠従戎　軀を揖てて遠く戎に従う